

哲學研究

第百七十四號

第十五卷
第九冊

藝術の自律性に就て

植田壽藏

一つの花を見ることは、この花としての視覚的意味が意味することであり、この『見ること』の徹底が、その花を畫くことであると考へるとすれば、藝術自律性の問題は如何に考へらるべきであるか。種々なる人が考へる様に、謂ゆる『美的ならざるもの』も、藝術に於ては本質的なる要素を爲すものであり、そこにこそ、美的なるものに對する藝術の、故に又、美學に對する藝術學の、特殊なる領域を限定するものがあるとしても考ふべきであるか。従て又、藝術史は、單に『美的なるものとしての藝術』の歴史に止まるべきでなく、藝術の要素と成つて映寫する種々なる文化現象に就ても考へらるべきである、藝術史は、常に、文化史若くは精神史の一面でなければならぬと考ふべきであるか。

『見ること』と『知ること』の關係を考へて見る事、知ることは、見ることの本質的なる要素であるか、否か、を考へて見ることは、右の二つの問題と、之れに伴ふ種々なる問題の、一つの交叉點を見ることであると思ふ。

知るとは何物かを知るのである。如何なる意味に於ても存在しないものを知ることには出来ない。存在するものとは、然し、そのものとしての意味を持つもの、否、意味そのものでなければならぬ。然らば、或る物を知るとは、夫れを見る、そのものゝ表象を持つことであるか。さうして夫れを、吾々は、その物としての意味が意味することゝして考へたのである。意味が意味するのは、唯だそのものを表象することに於てのみ、吾々に存在することが出来る。知ることが若し何等かの意味に於て、見ること、即ち視覺的意味の意味することから區別せられる特殊なる作用であるならば、その本質は素より或るものを見る、目に於て表象すること以外に於て見出さるべき筈である。

視覺的意味が意味することは、或る對象が目に於て意識せられることであり、何物か意識せられるには意識すること、故に又意識するものが無ければならない。意識

するもの、即ち意識内容そのものではない。けれども意識内容の無い處には、意識すること、故に又意識するものゝ意識も無い。意味が意味することは、意識内容即ち、客觀的なるものと、意識するもの、即ち、主觀の對立が生成することである。

一つの花の表象が有るとは、かゝる種類の、しかも又同じ種類の、如何なる外の花とも違ふ、そこに咲く、その特殊なる花としての視覺的意味が意味することである。夫れは無限に多様な花の一つであり、無限なる意味の一面である。之れを一つの花であるとするのは、最早やその花を見ることではない、その花の表象によつて、之れを花一般の、その特殊なる花の種類の一側として、之れに包攝するのである。花一般と言ふ様な或る固定した一つの表象が存在し、物尺で物を測る様にも、現に見られた一つの花を、之に比べて決定するのではない。かゝる意味では、表象ならざるもの、言はゞ存在せざるものへの比較である。かゝる場合の吾々は、普通に、花一般の姿を描かうとするかの様に、或る微かなる花の表象、若くは單に、表象への緊張とでも言ふべきものを意識するのを例とする。然し、勿論、之れに比較し、之れと同一なることを確かめて、一つの花の判断が成立つのではない。言はゞ之れ等の表象の『背後に在るもの』の無言の承認を受けるのである。

この『姿なき或る物』は、直ちに花を見る主觀そのものではない。花を見る主觀は、花としての意味の、その特殊なる花に於ける現れである。意味するとは、意味が、その特殊なるものとして自ら姿を取ること、自ら限定することである。無限の意志が、自ら意志してAと非Aの對立を生成することである。一つの花の輪廓は、空間的にその花がその花以外のものに對する輪廓であり、同時に之を見る主觀に對する輪廓である。吾々の目は、この輪廓を辿ることによつて初めてその花を見出すことが出来る。一つの花が、夫れに依つて自分をそこに浮立たせ、自分を主張するものは、即ち自分を他の物から區別する輪廓である。同じ意味に於て、また、その色の有る表面の輪廓によつて限定せられた、擴りである。然らば、花の輪廓に接續すると考へられる外物と、即ち、空間的に見られた非Aと、花を見る主觀は如何なる關係を持つか。吾々は普通に、一つの花を見つゝ、同時に、花に接する種々なるものを見ると考へる、さうして夫れを普通に『花の背景』を見ると言ふのである。けれども嚴密に考へて、吾々は、『二つのもの』を同時に注意することは出来ない。吾々の目が謂ゆる背景の一部に在る限り、吾々は、決して眞に花そのものを見てゐるのではない。その或るものと、花の二つを統一して見ることが出来ると言はれるかも知れない。けれども夫れならば、吾

々は最早や單なる花をでもなく、單なる或るものをでもなく、即ち、別々の二つのものをではなく、夫等のものを要素としての或るより高き對象を、『一つのもの』を見るのである。その或るものは、當面の對象として注目するものであり、最早その花に對する背景であることは出來ない。吾々の目が問題の一つの花を去つて、謂ゆる花の背景に目を移す時、吾々のそこに見出すものは、或ひは葉の群れであり、或ひは一本の幹であり、即ち明らかに或る視覺的對象として限定せられた、視覺的意味 B であり、若しくは C であり、即ち、A と同列に立つ視覺的對象であり、最早や決して、A に對する非 A そのものではないのである。確かに一つの意味 B は、A ならざる點に於ては非 A の一面である。非 A は、然し、明らかに限定せられた一つの意味ではない。A を除いて無限なる意味を含んだ無限の意志である。夫れ故吾々は、嚴密なる意味に於ては、一つの花の背景を知覺することは出來ない。知覺するものは必ず或る特殊なる視覺的對象である。吾々は一つの花の背景を、言はゞ唯だ意志し得るのみである。語を換へて言へば、この背景の名に於て、無限なる非 A の意味が意味せんと意志するのである。さきにも言ふ様に、一つの花が見えるのは、その花としての特殊なる色に於て擴がる表面を限る輪廓によるのである。その輪廓の線は、その花の輪廓として見ら

れる限り、それは唯だその花のみの線であり、普通に誤られ易い様に、之れに接する外物の持つ線ではない。この輪廓の線に沿ふ『外側』は、凡ゆる點に於て無限定であり、夫れがこの一つの花の背景である。即ち背景は無限である。一つの花はその輪廓によつて、この無限なるものに對して自分を浮立たす、同時に、花を見る吾々に對しても自分を主張するのである。吾々の目はその花そのものを描く目であり、同時に、無限なる意志に連るものとして之れに對立するものである。背景とは實にこの花を見る無限なるものとしての吾々が空間化して、花の『彼方』へ投げ出されたのである。繪畫の背景を單なる平面であるかの如く考へるのはそれを載せると考へられるカンプスの知識によつて、背景の意味を正しく理解することを妨げられたのである。繪畫が畫かれる下地としての意味を持つ『布』は、單なる平面の擴りではなくて、無限の奥行きを持つ視覺的意味の作業場である。背景が無限であると言ふのは、花として意味するものゝ無限を言ふのである。

一つの特殊なる花が見られる限り、夫れを見るもの、夫れに對立する無限なるものが無ければならない。夫れはその花を限定するもの、花たる意味の意志である。語を換へて言へば、一つの意味『花』は、その意味に於て無限の持續性を持つ。花の意識

は、その花として、無限の多様性を持たねばならない。その花としての一つの意味は、凡て之等の無限なる花の表象性の形なき貯蔵庫でなければならぬ。されば一つの花を見る主観、之れに對立する主観は、如何なる別の主観でもなく（言ふ迄もなく、單なる知覺、感情の集合と言ふ様なものではなくて）その花を見る主観即ち、その花に於て自ら限定する、しかも背後に無限なるものを潜めた主観である。一つの花の表象は實にこの様な主観に對立するのである。語を換へて言へばかゝる主観を『負ふ』のである。かゝる主観と、之れに對立する花、即ち客観の離るべからざる對立が、一つの意味の先驗的なる形式である。かゝる對立を除いては、如何なる對象の意識も無い、即ち、意味の現れは無い。一つの花の意識内容も、之を見るものも共に離るべからざる意味の半面である。さうして共に明白な意識の事實である。この花の表象と、それを見る主観の對立そのものが、更に對象化して眺められる時、この表象は、之れに對立する花一般に關係せしめられるのである。花に就ての判斷が成立するのである。花の意味自ら、自己を反省するのである。

意味する意味が自ら反省することは、然し如何なることであるか。意味が自ら現れて、特殊なる意識内容と之れを見る主観の對立が生起した。意味は自分をかゝる對

立として限定したのである。意味は現れた。意味は自分の、一つの過去を持つたのである。一つの花を吾々は見盡す時は無い。けれども如何に見續けて行くにはしても、夫れが花ならざるものに變ずる時は無い。花は見續けられ、その内容は次第に精細を加へて行く。けれども花はどこまでも自分を花として主張する。花なる意味が意味するとは、花が自分を外界に置くこと、自分の過去を織り續け行くことである。見られた花と成ることを加へて行くことである。見られた花に對立するものは、その花を見たものとしての(唯だそれとしての)みの(主觀である。意味は意味して見られねばならない。見らるべきものは見られたものと成らねばならない。見る者は見たものと成らねばならない。時間は意味の形式である。見られたものとしての表象と、見たものと成つた主觀の對立、即ち、その表象の意味が知られることである。意味そのものが自ら反省することである。『見られた表象』は之れを知る判斷の主語であり、見たものとしての主觀は、これを包攝する述語である。

勿論、かゝる關係の項としてその特殊なる表象を位置付けるのは、最早やそれを『見る』ことではない。吾々は通常、判斷の主語と成るべき對象の色と形を見ながら、『之れは花である』と言ふ。けれども夫れは單に花を見る立場が、夫れを主語として、即

ち『見られたもの』として省みる立場に混じたのみである。一つの花が判断の主語として立つ限り、吾々は夫れを純粹に見てゐるのではない。見られる花が、既に見られた花として『その花を見た主観』に、即ち花と言ふ述語に包攝せられて立つのである。過去に置かれた見ること即ち、夫れを知ることである。夫れが見たことの記憶に深き關係を持つのはこの故である。記憶は、過去に返して考へられた意味の意志である。

知るとは實にこの意味に於て、直觀の立場を去つて、反省の立場に立つことである。見られるものと見るものを對象化することである。けれども夫れは、一つの花を見るときと言ふ様に、一つの表象内容を持つことではない。かゝる意味での表象に對立し、之れを見るもの、自分自身は無内容にして、單に或る表象に對立すると言ふ主観、表象なき主観を對象化するとき、夫れが一つの花の表象の過ぎ去れるもの、即ち、主語に對立する述語と成るのである。素より然し、對象化するとは、異なる立場に立つて見ることである。夫れを對象として見ることである。見られた花と、見たものゝ各々がではなく、『對立』そのものが、かゝる事實の背後に於て豫想せられる立場から即ち知的なる立場に於て統一せられることである。意味する意味は、主観と客觀の對立と

して現れる。夫れが意味する意味の形式である。この分たれた両面が統一せられる時、意味する意味は意味した意味と成る、知られる意味と成るのである。花の知識は、夫れ故に、花の意味には避くべからざる必然の豫想であり、捨つべからざる一面ではあるが、花を見ることとしての意味とは異なる一面である。花として創造するもの、意味するものとしての意味に對する、知るもの、自ら反省するものとしての一面である。自分自身を形作る意味が、その現れた己が姿を、形無き鏡に映すのである。

知ることは花の表象を持つことではない。花に就ての主語と述語の關係を知るのである。繪畫は、かゝる關係そのものを畫き得るであらうか。知識は、眞に『知ること』は、藝術の對象たり得るであらうか。確かに、一枚の繪に於ける種々の對象は、凡てが孤立して見られるのではなく、却て凡て種々なる關係に於て統一せられ、更により高き統一の要素と成つて、一つの作品が描き上げられる。そこには明らかに要素と之れを統一するもの、部分と全體の關係がその作品としての視覺的意味の内容として描かれてゐる。けれどもかゝる統一を、様々の部分の中に見出すことは、知識に於て、主語と述語の關係を見出す様なことではない。畫かれたものゝ間に統一を見ると

言ふのは、判断の場合に於ての様に、夫等のものゝ間に於て包攝關係を見ると言ふことではない。畫かれた對象相互に於ける、即ち、現に表象することそのことの間に於ける、統一である。見られたものとしての對象を、姿さへも無き意味一般に關係付けることではない。

なせ、夫れならば、例へば種々の自然科學の原理を説明する爲に説明圖が描かれるのであるか。旅行者の爲には地圖が描かれるのであるか。建築家の爲には設計圖が用意せられるのであるか。確かに優秀なる製圖家は、彼等の製圖が美しく見られる爲に、即ち純然たる美的要求の爲にも、美しき線と表面を描かうとするではあらう。けれどもそれは、製圖そのものゝ意味に取つては、勿論餘技である。そこに要求せられるものは、方と空間の關係を表はすことの正しさである。そこに描かれる線は唯だ、方の方向、若くは、空間の限界を明らかにする爲めであり、色彩は唯だ、或る空間を明晰に他と區別する爲めである。即ち、その線及び色を通して、方若くは空間の關係を知る爲めであり、その線及び色そのものを見る爲めにはない。然らば凡て之等の説明圖は、見る爲めにはなく、明らかに知識の爲めに描かれたものではないか。知識の爲めの藝術が存在するのではないか——かゝる疑問が起されるかも知れない。

けれども、製圖家は、果して眞に『説明圖』を『描いた』であらうか。彼等の描く目も互える程明晰な細い線から、假令純粹に目を悦ばす爲めの用意が加はつてゐることを抽象しても、夫れ等の『線』は、嚴密に線そのものは、正確に彼等の與ふべきものを與へたであらうか。彼等の與ふべきものは、力の方向であり、若くは、空間の限界である。然し、力の方向と空間の限界は、假令、髮よりも細いとは言へ、彼等の描く様な實線として見ることは出来ない。彼等の描く實線そのものは、それ自身直ちに、力の方向と空間の關係を表はすものではない。夫れ故にこそ、一つの説明圖はそこに唯だ複雑なる線の方向と長さを『見る』外も無き人々に取つては、語を換へて言へば、そこに語られた知識を理解してゐない人々に取つては、何の説明にも役立ち得ないのである。説明圖を見ると言ふのは、單なる言葉の慣用に過ぎない。夫れは如何なる場合にも『讀む』即ち判断するのである。知識は説明圖に於て見られるのではない。知る人の内なる知識の領域に於て考へられるのである。夫れは繪畫が描かれる様に、見ることが徹底したのではなく、單に知識が書き止められたのである。夫れが説明圖として描かれる限り、そこには、文章の姿に於て知識が傳へられることに比べて、本質的に、より以上なる要素を含むものではない。夫れ許りではない。實に屢々、文字の助

けを藉つて、若くは線や表面そのものに文字的意義を附することの手段によつて、初めて説明することが出来るのである。夫れにも拘らず、種々なる理由から、かゝる説明圖が描かれるのは、そこに一つの説明圖以外の意味が、私かに人々の注意をそれて混在するからである。語を換へて言へば、説明することそのことが、ではなく、説明せらるべき對象そのものが、繪畫と共通するものを持つからである。種々なる空間關係が問題と成る場合は言ふ迄もなく、力と雖も、自然科學の考へる力は、凡て或る空間内に、種々なる方向に於て作用するものとして考へられる故に、夫れ等は凡て空間性を持つことに於て繪畫の對象と共通するものなるが故である。即ち説明圖に於て描かれるものは、説明せらるべき對象の、空間的なるものとしての一面であり、かゝる一面を持つ種々なる對象の間に於ける、(夫れをこそ説明せらるべき)知識そのものではないのである。知られるものが描かれるのではない、之れに伴ふ、單なる伴隨に過ぎない、繪畫的一面が描かれたのである。さうして夫れを見るに止まる限りに於て吾々は單なる色と線のみを見るのである。夫れ等の線と表面の間に於て、或る知識的關係を讀む時に於てこそ、初めて眞の説明圖なるものが成立するのである。

結局、吾々は『知ること』を畫くと言ふことは出来ない。畫かれるものは唯だ見ら

れるものゝみである。形象藝術は唯だ見ることの完成であり、知ることの完成であることは出来ない。見ること、畫くことを通して、その上に立つて、知ることが完成すると言はれるかも知れないが、知識は藝術の延長として生まれ出づることは出来ない。見ること即ち反省することではない。如何に見ることを進展しても、夫れが直ちに知ることゝは成らない。見ることが知ることに移る爲めには、立場が翻へらねばならない。見られるものが見られたものと成り、之に對立する見たものと共に、より高き立場から統一せられねばならない。知識は藝術から生まれ出づるものではなく、唯だ藝術として作られたものを對象として知り得るのみである。之れが知識と作られた藝術の唯一の關係である。

一つの花としての視覺的意味は、その花に就いての凡ゆる視覺的知識の根源である。勿論、夫れはその花の凡ゆる意味を盡すものではない。その花の視覺的意味には、その花の香氣や手觸りや、向日性や、營養吸收の作用等、種々なる意味が含まれるものではない。凡て之れ等の屬性も、その特有の色と形も、凡てを統一するものはその花全體である。かゝる『全體』を目に於て見ることが出来ないことは言ふまでもな

い。見るものは唯だ、その花特有の視覺的なるものゝみである。之れを除いた他の様々の屬性を知る爲に、一つの花の色と形が、有效に、描かれる如く考へるのは誤りである。逆も又同様である。他の屬性を如何に精しく知り盡しても、夫れはまだ決してその花の色と形を知ることではない。その花の色と形の根源は、屢々誤解せられ易い様に、その花の他の様々の屬性ではない。之れに取つては、他の屬性は單に偶然なる結合に過ぎない。それを結合するものは、唯だその花として現れる意志の自由である。その花に特殊なる色と形の起原は、唯だその特殊性に於ける視覺的意味あるのみである。意味は無限にその意味である。異なる意味から轉生し來る意味の如きは考へることは出來ない。その意味としての、一つの特殊なる意味ならざる時を持つ意味の如きは考へることは出來ない。

けれども與へられるものは、一つの花であつて、單なる色と形ではない。五官の對象であり、知識の對象である様な花の全體であると言はれるにはしても、薄色の花片を通る濃い線は、美しい調和を畫く線であると同時に、その花片の缺くべからざる營養機關たることを意味する脈であると言はれるにはしても、その線の方向、長さ、太さを見るのが直ちに、種々の植物學上の實驗によつて初めて知り得る様な、花の營養

機關たる意味を知ることではない。その脈の色と形が、かゝる作用を營むのではない。色と形の背後に於て自然科學の立場に立つて考へられる特殊なる物質の結合がその働きのするのである。吾々の目が見得るもの、故に又、畫き得るものは、唯だその色と形である、この特殊なる物質の作用ではない。かゝる作用は唯だ實驗と考察が知り得るのみである。その働きの方向とその擴りの方式を、夫等の脈を見ることによつて知ることが出来るかと考へる人々もあるか。確かに、先きに言つた様に、その花片が、視覺的なる對象として空間に擴がる故に、精しく言へば、視覺的なる對象として空間に擴がること、之を一面の屬性とするその花全體としての意味そのもの、意志である故に、他の一面として含まれる營養作用の方式もまたこの一面と矛盾することは出来ない。花はその形と表面を持つ故に、營養機關たる脈もまたその特殊なる空間に於て擴がらねばならない。營養作用はその空間に擴がるものを養はねばならない。二つの意味は空間性によつて統一せられねばならない。けれども線が空間に擴がることは、即ち營養作用が現れることではない。花片の脈の作用は、薄色の作用でもなく、營養的なる濃き色の線でもない。さうして繪畫の描き得るものは、薄紅の花片に於ける深紅の線であることは出来る。精妙を極めた花の營養作用

そのものであることは出来ない。夫れを營養機關であると知るとは、その線の色と形を見ることではなく、その線の視覺的意味を知ることでもない。目の對象としてのその線の起原は、如何なる外の意味でもなくて、唯だその線としての視覺的意味の底なる意志あるのみである。異なる種類の二つの意味は、互に同じ段階に立つ。孰れの意味も他の意味を限定することは出来ない。之れを限定するものは、より深く彼等の底にあるもの、彼等に取つて無限なるもの、即ち『花』の意志である。如何なるものが『興へられる』と考へられるにはしても、目はその色と形を見る外はない。目を以て音を聽くことは出来ない。如何に多くの屬性が一つの花に數へられるにはしても、色と形を除いては、如何なるものも繪畫の能力が達し得る以外のものである。

けれども花を見るものは、單なる目ではなくて、種々なる感官を持つ人間である。彼が見る花は、色と形であると同時に、香ひ、味ひ、手觸りである。之れ等の様々な意味が意味する表象であると同時に、之れ等の意味の結合を意味する『物體』である。同様に、家屋を造り上げる石と木材は、雨、雪その他凡ゆる生活を脅すものを防ぎ、太陽の光と熱と、凡て生活を助成する性質を含んだ物體であると同時に、色と形の、目の對象

である。一つの花が目の對象として要求せられると同時に、香ひの對象としての興味を呼ぶ様に、一つの建築も、種々なる意味の生活を助けるものとしての本來の目的以外に、若くはそのものゝ一面として、その構成の外観に美的なる要求が充たされやうとするのであると言はれることも豫期しないのではない。けれども吾々の感官は、果して『感官の結合』として『同時に』作用するものであらうか。意味が意味するとは意識することであり、意識するとは意識の運動、即ち意識の特殊なる表象方式に於ける運動である。語を換へて言へば、夫れ／＼の感官を通して特殊なる表象を持つことであり、同時に、之れに伴ふ運動を身體各部に喚び起すことである。言ふまでもなく、一つの意味の現れ以前に、之れと全然没交渉に、『動き得る身體』なるものが存在する故に、意識の運動が、偶然にも之れに反響すると言ふのではない。一つの意味の形式としての運動を、生理學的、物理學的立場に於て考へたものが身體の運動である。心理學者が論ずる様に、この身體の運動を、觸覺の作用の一面として考へるならば、視覺は觸覺と離るべからざる親密さに於て結合すると言ふべきであらう。さうして夫れは、夫れに依つてこそ藝術意識が單なる觀照の境地を過ぎて、藝術作品に到達すべき重大なる事實を知ることである。種々なる感覺も同様に、觸覺と結合する

と言ひ得るであらう。けれども夫れと同じ意味に於て、視覺と聽覺が、若くは、聽覺と嗅覺が結合すると言ふことは出來ない。視覺と聽覺に於ての様に、運動の形式を通じて、若くは、味覺と嗅覺に於ての様に、夫等のものが喚び起す感情の類似によつて、種々なる感官の間に於ける或る關係を見出すことは出來るであらう。けれども夫れは、固より、花の種々なる屬性を、一つの結合體として同時に表象すると言ふ様なことではない。

例へば一つの建築に於て種々なる要求が充たされ様とすることは明らかである。さうして夫れは謂ゆる『美シエ、エネク、ンストなる藝術』(若くは『美エス、テ、エ、ゲ、イ、ス、シ、エ、ク、ン、ス、ト的なる藝術』)以外の、凡ゆる藝術に就ても同様である。凡て之れ等の、人間の(最も廣き解釋に於ての)生活の分化を意味する(分化そのものを、さうして、決して、生活を愉快ならしめる爲の手段を意味するのではなき)勞作を、『藝術』の名に於て呼ぶことは自由であらう。即ち、この意味に於ての藝術の一つとしての建築は、『視覺的なる美なる藝術』と謂ゆる『實用的なる藝術』の結合體である。一般に、かゝる結合體としての藝術は、純粹に視覺的なる美なる藝術に比べては、人間性のより廣き領域の要求を充たすものではあらう。唯だ注意すべ

きは、この藝術に於ていも種々なる満足は、凡て夫れ々異れる感官の領域に於て各々獨立に現れる外もないことである。視覺的なる満足は唯だその色と形とのみによることである。如何なる別の建築としての長所と欠點が見出されるにしても、夫れが直ちに、その建築に於ける視覺的なる美を左右することは出來ない。如何なるものが興へられても、目は唯だ色と形以外の如何なるものも見ることには出來ないからである。視覺的意味より外に何ものも目に於てその働きを表はし得ないからである。同様に、如何に見る目に傑れたる建築と雖も、直ちに夫れ故に、保温装置の欠點を以何ともしがたいことを多言する必要があるであらうか。建築の如きは、實に種々なる意味の結び付く藝術である。少くとも夫れは、美なる藝術としての一面と、實用的なる藝術としての一面が結び付くものとして考へられた。固よりかゝる區別は適切なるものでないのみならず、屢々後の半面を強調し、夫れこそは生活を楽しくする爲の、欠くべからざる手段即ち、建築の目的であり、前者はこれに附隨して單に目を悦ばずに過ぎないものであると言ふ如き思想を導き勝ちであり、若くは逆に、かゝる思想を根柢として現れるのである。生活を楽しくする爲め的手段であると建築を考へる人に取つては、美しき外觀もまた同様に手段ではないであらうか。如何な

る厚き壁を持ち、大いなる窓を持つにはしても、卑しき外觀を具へた建築に、住み心地よき、生活の爲の手段を得たとして果して人は住むことを欲するであらうか。唯だ建築がかゝる『手段』と考へられる限り、さうして建築の色と形が表はすものが單にその色と形が與へる快感の故に、よき生活の爲めの手段であると考へられる限り、謂ゆる、實用的なる半面を暫く考察の外に置けば、形象藝術としての建築は、全く藝術としての自律性を奪はれやうとするのである。美術としての建築は、唯だその建築としての視覺的意味自らの完成であるより外の如何なるものでもあり得ない。爰に美術の、何ものを以ても冒すことの出来ない自律性が存在するのである。謂ゆる實用的なる半面に於ても、又、夫れくゝの領域に於て、各々の意味の完成を見ることによつて、この半面として總視せられる建築も、また正當に夫れくゝの藝術としての自律性を見出すであらう。唯だどこまでも區別すべきは、一つの建築を、美術としての建築たらしめるものは、純粹に視覺的なるものであり、如何なる意味も之れに對して力を加へないことである。語を換へて言へば、藝術として正當に考へられる建築は、種類こそ違へ、演劇がその一例である様に、様々の自律的なる藝術の統一であり、普通に考へられ易い様に、美術としての純粹なる藝術が、藝術ならざるものとして考へられ

た『實用的なる半面』に混じた様なものではないのである。

この意味に於て建築は、明らかに機械の如きものから區別せらるべきものを持つのである。種々の機械は、正しく言へば、機械の形體とその運動に於ける外部的なる觀照性と、機械としての『はたらき』の精巧性を對象とする内部的なる觀照性を凡て含めて、夫れ自身明らかに美的なるものであり、故に又種々なる藝術の對象と成ることが出来る。けれども夫れは、直ちに機械の本質そのものが『藝術作品』であると言ふことではない。機械の本質は、その特殊なる機械の目的として一義的に限定せられたる『もの』を産出するとそのことである。その産出の仕方が吾々の意識に喚び起す觀照性ではない。機械の本質は、その爲にこそその様な機械も作られた目的は、例へば機が美しき絹物を織ることであり、速さと精巧さに於て驚嘆すべき輪轉機が繪畫や小説を印刷することであり、もあらう。機械の産出するものは傑れたる藝術作品であることは出来る。けれども機械性そのものは、筆、鑿など、共に、又藝術家自身の手と共に、作用としての意味の形體化、即ち藝術の『手』であつて、夫れが直ちに、『見られるもの』としての意味の形體化、即ち藝術作品ではない。

建築の如き、否、一般に視覺的なる藝術は、眞にかゝるものとして存在する限り、單に

見られる爲のみに作られることが出来るのであり、描かれ、形作られるものは、どこまでも、唯だ見られるのみである。故に又當然、宗教歴史、文學等に語られた事實を對象とする繪畫彫刻も、純粹に視覺の對象として、唯だ夫れのみとして存在するのである。

確かに東西の、宗教、歴史、その他種々なる物語を畫く畫家達は、たとへばプウサンが、希臘、羅馬の歴史や文學を讀み、聖徒達の傳記を調べたと言はれる様に (Michel, Histoire de l'Art, VI, I, p. 237) 彼等の畫く對象を、凡て夫れ等のものとして畫き、またその様なものとして受け取られることを充分豫想したではあらう。或ひは、更に、彼等の作品を見る公衆が、彼等の撰び取る場面構圖、各々の人物の表現等を、種々の知識に本づいて、如何に特色あるものであるかを認めることを希望したでもあらう。

けれどもかゝる美術家は、彼が一般公衆に豫想する知識が如何なるものであるかを、實は彼自身のものを、一般公衆の持つものであらうとして要求するより外に、如何にして見出すことが出来るのであるか。その『彼自らのもの』を、形象藝術家たる彼が、表象することを除いて、如何にして見出すことが出来るのであるか。彼が豫想する公衆の態度は結局、彼が彼自らの作品に對する藝術的態度以外の如何なるもので

もあり得ないではないか。ヴザアリに據れば、フランゼリコは、祈りを捧げた後でなければ、嘗て筆を執らず、涙を流すことなしには、嘗て『十字架の基督』を畫かなかつたと傳へられる。(Vasari: Lives of the Most Eminent Painters, Sculptors and Architects. tr by G. du C. Devere, Vol. III. p. 35) 夫れは、製作そのものが直接に與へる藝術的感激を意味する涙ではなくて、敬虔を極めた聖僧の深き信仰を意味するものと見るべきであらうか。然しながら、敬虔なること彼の如き聖僧が——一度出來上つた繪には、決して筆を加へることも畫きなほすこともしなかつた、さう言ふ最初のもの、雖も、神の心に依ると信じられた程の彼が、(Tintoretto) 彼が畫いた十字架の基督を、神の心に導かれた繪であると思ふ代りに、基督の現身であることも考へ得たであらうか。怖らく彼は(夫れを製作そのもの、與へる藝術的感激を意味するものと考へない限り) その繪に於て、否、夫れを通して、語を換へて言へば、その繪を去つて、敬虔なる信仰の涙を流した人でなければならぬ。彼れの作品そのものに就ては、唯だ見ることが、純粹に見られることのみが、豫想せられねばならない。さうして實に見られるとは、唯だ視覺的意味が意味するのみである。十字架の基督に就て敬虔の涙を流す時、人はもはや、見る立場、藝術の立場を去つて、宗教の立場に入るのである。さうして夫れは言ふまでもなく、藝

術的立場の單なる延長ではなくて、一つの異なる立場への飛躍である。

藝術の世界を去つて、宗教、道德その他種々なる世界に移り入ることは人々の自由であらう。けれども夫れは、言ふまでもなく、之れ等の種々の世界に於ける、明定せられたる區別の混同が許されることではない。畫かれた―語を換へて言へば、繪畫の對象として見られる、『基督』は、どこまでも、その作品の表はず光景の間に於ける、その表出と態度に於ける『基督』の名に於ける、色と形の統一、即ち視覺的意味であり、言ふまでもなく、基督自體ではなく、また基督の象徴でもない様に、畫かれた『神に祈る人』は、その名に於ける視覺的意味の現れに過ぎない。けれども神に祈る人を畫くとは、即ち神に祈ることの一つの現れであると言ふか。確かに夫れは、―跪づいて合掌することは、眞に信仰する人が祈つた姿ではあらう。けれども夫れが、繪畫の對象として畫かれた限り、外部的なる美術家の執意が、假令何ものを畫かうと抱負したにしても、『祈る人』とは、純粹視覺的意味を呼ぶ名稱であり、そこには祈ることそのことの本質は畫かれてゐないのである。繪畫の畫き得るものは唯だ視覺的なるもののみである。

私は今や『藝術』は『美的なるもの』であり、唯だ夫れのみであると考へることを正

當に許されないであらうか。視覺的意味、聽覺的意味等の凡ての意味が純粹に進展する時に、夫れ等は凡て美的即ち觀照的であり、同時に夫れが、凡て藝術的なる活動そのものである。その進展の或る段階に達したものが、吾々の普通に考へる藝術作品である。

然らば、謂ゆる『藝術學』と美學の關係も明白であらう。藝術學の名とその特殊なる領域を限定することは自由であらう。唯だ一面に、『美的なる自然』が見られることを、藝術活動の外に置き、他面に於て、藝術が本質的に『美的なるもの』以外のものを要素とすると、言ふ考へを根據として、藝術學は美學から獨立すべきであると、種々なる人々の考へは誤りである。

然らば、更に、かゝる形象藝術の歴史が、本質的に、宗教、道德、その他種々なる文化現象との關聯に於て論せらるべき必然を持たないこともまた従つて明白ではないか。之れ等の藝術を一面とする文化史、若くは精神史こそ、凡て之れ等の關聯を知るべきではあらう。藝術の歴史は、然し、どこまでも、藝術的意味の進展の追求である。夫れが直ちに、より高き、若くはより廣き、意味の歴史を意味する文化史、若くは精神史であるかの如く考へるのは、驚くべき意味の混亂である。藝術の背後は唯だ藝術の意味を生む無限なる意志あるのみである。